

軽々しく、あたり前の様に使っていた言葉「共生」  
われわれは、すでに彼らを地域から抹殺していたのに

吉村音楽研究室 吉村由香里

としさん、

ご登壇下さり、また、放課後までのお付き合いの中で、貴重なエピソードを含め大切な心を伝えて頂きましてありがとうございました。

健常者を想定して作られた社会の中で、それまでに例の無い全くの手探り状態で、全盲の身で国会議員になること。次々に新たな変革を起こし社会を大きく前進させた歴史的な賢人としさんに畏敬の念を抱きます。

議員バッチを付けた途端に逆転する世間の、滑稽とも取れる対応。いい意味での政治力。その狭間で悩みを抱えながらも、決して驕らず謙虚さを失わないその姿勢に、としさんのお人柄を感じました。

《 お話の中で私の心に響いた言葉 》

\* 支援と言うものは、一方的、一つの空間、一つの作業所…そこで働く「する」「される」関係では無いのでは？

\* 「一緒に生きる」「お互いに支え合う」いい意味での影響を障がい者からも貰う横の関係。

\* 「共生」 難しい言葉が大衆化すると、本来の意味が歪められる。実態が隠蔽される。

\* 「共に生きる」

私がもう一つ、としさんに感謝したい事。

編著「私たちの津久井やまゆり園事件」の、としさん言葉を通して、ようやく私の中で封印していたこの事件と初めて向き合う事が出来ました。

広い意味でこの事件ほど加害者と被害者の境目が解らない事件は無いと思います。特にプロローグの初めの2行に、心に衝撃が走りました。

植松被告は津久井やまゆり園の重度重複知的障害者を殺したが、  
われわれは、すでに彼らを地域から抹殺していた

やまゆり園のご家族と交流された中でお感じになられたとしさんの想い。  
親は入れるには事情がある。家族の中には世間に知られるのが恥ずかしいと思  
う人がいる。植松被告も同じ。家族も親も被害者。  
太宰治が「人間失格」で描いているように、加害性のある家族へと世間が追い  
込んでいる。単に福祉の問題では無い。一人ひとりが問われている。そこから  
本当の共生が始まる。  
そのような、としさんのお話に共感しました。

軽々しくあたり前の様に使っていた言葉「共生」について、改めて考えてみた  
いと思います。

ご登壇を終えホッと寄り添いあわれた幸せなご夫婦のお姿。  
視力を失う原因になった難病にかかったとしさんの呼吸がとまらないように、  
徹夜して、剥がれて痰に絡んだ皮膚をピンセットでつまんでおられたお父様  
の笑顔が、ふと私の心に浮かびました。